

春季大会発表要旨

国際研究集会

文学のインターセクション

——翻訳とテキストの複数性

のテキストに即した具体的な考察や多様なコンテキストに開かれた対話の場が必要である。テキストのうえで言葉は翻り、交わり、ふれあい、時には激しくぶつかりあい抵抗しながら紡がれてゆく。こうした問題に関心を持つ国内外の研究者の積極的な参加を呼びかけたい。

【大会の趣旨】

運営委員会

第4回国際研究集会では、「文学のインターセクション」をテーマとし、様々な要素が衝突し、混ざり合い、交差する場Ⅱインターセクションとして、文学を捉え直してみたい。言語・空間・時間等、文学テキストの上で異質なものが交わりあい変質する様相に注目しながら、その接触や多層性を明らかにすることを試みる。

その中心的な論点のひとつが翻訳である。翻訳をめぐるこれまで多様な議論が展開されてきた。ポストコロニアル批評やカル

チュラル・スタディーズにおいては、翻訳という営みが植民地に対するまなざしや国民国家の形成に関与してきたのが問われてきた。また近年の世界文学をめぐる議論においては、英語中心主義を相対化する翻訳行為の可能性が示されている。

翻訳は、原典の情報をできるだけ忠実に伝達することが求められる一方、原典から生みだされた新しいテキスト、すなわち創造的・対話的な行為として捉えなおすこともできる。翻訳の対話性は、原作者と翻訳者の間にとどまらず、作者と読者の間、さらには異なる文化の間で展開する。言葉の交錯のありようを凝視することで、創造と伝達の複層的な様相が浮かび上がってくるだろう。

こうした議論をより深めるためには、個別

特集

翻訳の現場

——伊藤比呂美『とげ抜き 新巢嶋地蔵
縁起』のドイツ語・英語訳・ノル
ウェー語訳をめぐって

【特集の趣旨】

(5)
特集「翻訳の現場——伊藤比呂美『とげ抜き 新巢嶋地蔵縁起』のドイツ語・英語訳・ノルウェー語訳をめぐって」は、創作と翻訳の現場を繋ぐことで、翻訳行為の具体相を明らかにしようとする企画である。今回、本学会初めての試みとして原作者の伊藤比呂美氏、ドイツ語版訳者のイルメラ・日地谷リキルシユネライト氏、英語版訳者のジェフリー・アングルス氏、ノルウェー語訳者のイカ・カミンカ氏によるトークセッションを行う。また、進行役を伊藤比呂美研究に関わってきた坪井秀人氏と福尾晴香氏がつとめる。トークセッションのかたちをとることで、原作者と

翻訳者の間に線引きをするのではなく、フラットな場でそれぞれの創作と翻訳における工夫や問題点、例えば翻訳現場において生じる誤訳の問題等について率直に語り合い、フロアとの対話にひらく機会を作りたい。

伊藤氏は詩人として、これまで説経節などの語り物を含む古典文学作品をテキストに数多く引用し創作を行うとともに、古典文学作品や仏典、英語で書かれた詩や散文の翻訳も行ってきた。今回、トークセッションで取り上げる『とげ抜き 新巢嶋地蔵縁起』(講談社、二〇〇七年)にも様々な他者の言葉が取り込まれており、詩と散文というジャンルを超えた独自の文体が生み出されている。『とげ抜き』を翻訳することは、複数の言葉や声絡み合うテキストの運動を解き明かす試みであると同時に、翻訳により生み出されたテキストそのものがテキストの複数性を体現するプラットフォームにもなりうるだろう。ドイツ語版訳者の日地谷リキルシユネライト氏は、三島由紀夫や日本の私小説、日記といった文学形式に関する研究を行う一方で、大庭みな子、井上靖の小説・エッセイなど多くの日本文学を翻訳してきた。また、英語版訳者のア

ングルス氏は、日本文学における美少年表象に関する研究を行うとともに、高橋睦郎、折口信夫や多和田葉子など様々な詩や小説を翻訳し、自らも詩人として創作活動を行っている。さらに、カミンカ氏は、村上春樹のノルウェイ語訳者として知られ、他にも夏目漱石や谷崎潤一郎などの小説、平出隆をはじめとした現代詩の翻訳も手がけている。三者は伊藤比呂美の詩集を世界でいち早く翻訳した点においても重要な存在である。これまで外国語に翻訳された日本の現代文学作品は数多くあるが『とげ抜き』という固有のテキストをめぐって、原作の日本語を含めた異なる言語のあいだに立って議論を展開することで、創作と翻訳の現場を切り結ぶ文学のインターセクションの生々しい実態が浮かび上がってくるのではないか。

運営委員会

プロフィール

伊藤比呂美

東京都板橋区出身。詩人。一九七八年に第一詩集『草木の空』でデビュー。同年、第一六回現代詩手帖賞を受賞した。一九八〇年代に詩集『テリトリ論2・1』などを刊行し、女性詩ブームをリード。同時期には、『良いおっぱい悪いおっぱい』などで妊娠・出産・育児エッセイというジャンルを確立した。一九九七年に渡米し、子育てや両親、夫の介護を題材とした作品を書き続ける。一九九九年『ラニーニャ』で野間文芸新人賞、二〇〇六年『河原荒草』で高見順賞、二〇〇七年『とげ抜き 新巢鴨地蔵縁起』で萩原朔太郎賞、翌年に紫式部文学賞、二〇二一年に『道行きや』で熊日文学賞および香梅アートアワードを受賞。その他、受賞歴多数。現在は、熊本に拠点を移し、大学で教鞭を執りながら多くの若手詩人を育てている。その他、近年の著

書に『ウマシ』『シヨローの女』『いつか死ぬ、それまで生きるわたしのお経』『伊藤ふきげん製作所 思春期をサバイバルする』などがある。

イルメラ・日地谷IIキルシュネライト

一九九一年よりドイツ・ベルリン自由大学教授（日本文学・文化史）、二〇一九年よりエメリタ（emerita）。一橋大学、トリアー大学で教授を務め、一九九六年から二〇〇四年まで東京に拠点があるマックス・ウェーバー財団のドイツ日本研究所（DIJ）所長を務めた。二〇一〇年から二〇一五年までフリードリヒ・シュレーゲル文学研究科長を務め、現在、自由大学クラスター・オブ・エクセレンス「時間的コミュニケーション・グローバルな視点での文学の実践」研究責任者としてプロジェクトを実行中。『女流』放談（二〇一八年）や、伊藤比呂美の詩散文選集（一九九三年）を初めて外国語に翻訳するなど、ドイツ語、英語、日本語による日本文学・文化に関する多数の著作があり、インゼル・スールカンフ出版社『日本文庫』三四冊などの発行責任者

を務める。また、二〇二二年出版完成の『和独大辞典』（全三巻）の創刊者、共同編者でもある。一九九二年にドイツ研究財団（DFG）のゴットフリード・ヴィルヘルム・ライブニッツ賞、二〇二一年に国際交流基金賞を受賞。一九九四年から一九九七年にはヨーロッパ日本研究協会会長を務めた。

ジェフリー・アングルス

アメリカ合衆国オハイオ州出身。西ミシガン大学日本文学教授、詩人。一九八七年、高校在学中に日本に留学し、下関に三ヶ月ほど滞在したことがきっかけとなり、日本語や日本文学に対する関心を深める。オハイオ州立大学大学院在学中の二〇〇〇年頃から短編小説や詩の翻訳を始め、二〇〇四年に、村山槐多と江戸川乱歩の文学における男性同性愛の表象に関する研究で博士号を取得。その後、多田智満子、伊藤比呂美、高橋陸郎、折口信夫、多和田葉子などの作品を翻訳し、Japan-U.S. Friendship Commission Prize for the Translation of Japanese Literature、Harold Morton Landon Translation Award、全米芸

術基金援助金、PEN/Heim Translation Fund Grants、リンドシー・三好将夫翻訳賞など数多くの賞を受賞した。二〇一七年には『わたしの日付変更線』で第六八回読売文学賞を受賞し、詩人としても活躍している。

伊藤比呂美の詩を翻訳したコンピレーション詩集を刊行し、『とげ抜き』を含めた伊藤の様々な作品の翻訳に取り組んでいる。その他、最近の翻訳作品に林芙美子『放浪記』がある。

イカ・カミンカ

ノルウェー王国ベルゲン出身。フリーランスの翻訳者で、主に英語と日本語をノルウェー語に翻訳する仕事を行っている。美術史と建築学を学び、一九八六年に日本庭園について研究するため初来日。以後、ベルゲン大学の博士課程で日本のラブホテルの美に関する研究を行った後、満期退学し、翻訳者となった。

村上春樹の作品を数多く翻訳し、他にも谷崎潤一郎『細雪』『陰翳礼讃』、夏目漱石『こころ』など多くの翻訳を手がけている。二〇一二年に村上春樹『1Q84』の翻訳でBastian Prizeを受賞。二〇一八年には、一八九五年から二〇一二年にかけて日本語で発表された短編小説を翻訳したアンソロジー『Knakkeknakk』の共同編集を行った。近年、